貴重書紹介

駿河版『大蔵一覧集』－日本初の金属活字出版物－

堀川（ほりかわ）　貴司（たかし）
（附属研究所斯道文庫教授）

日本の書物文化の画期が17世紀初頭にあることは，活字印刷の導入と普及，それに続く商業出版の興隆という点だけを見ても明らかだが，それまで埋もれていた古い写本を発掘し世に流通させたという，もう一つの動きも重要で，朝廷・幕府を頂点として大名・公家・寺社などの膨大な蔵書が形成された。

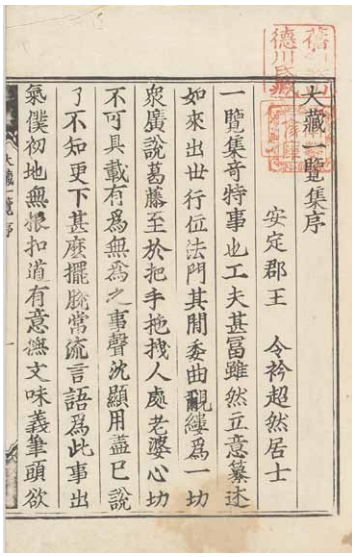
この両者に大きく関わっているのが徳川家康である。まだ豊臣秀吉死去後の天下の趨勢が定まらないとき，家康は伏見城にあって漢籍など11点を活字印刷により出版する（伏見版）とともに，禅僧たちに命じて公家や寺社の持つ古写本を写させ，自らの蔵書を充実させていった。幕府創設後，息子秀忠に将軍職を譲って駿府に隠居するときも，その蔵書を手元に置き，漢学者林羅山に管理させた。その後，生前秀忠に一部を割愛，死後御三家に分与され（駿河御譲本），それぞれの蔵書の中核となっている。

図１　外観

ここ駿府においても，家康は側近の林羅山・金地院崇伝に命じて出版を行った。それが駿河版で，慶長20年（＝元和元年，1615）の『大蔵一覧集』および翌元和２年の『群書治要』の２点が刊行された。

駿河版がそれまでの活字出版物と大きく異なるのは，活字が木製ではなく金属製であることである。金属活字は13世紀高麗で実用化され，朝鮮王朝において進化を遂げた。秀吉の朝鮮侵略により，その技術と書物が日本にもたらされたが，コストがかかるためか，日本では木製の活字が専ら使われていたなか，家康が初めて試みたのであった。

福井保『江戸幕府刊行物』（雄松堂出版，1985年）によると，活字は既に伏見において鋳造されていたのを，蔵書とともに駿府に移動させ，さらに追加で鋳造したものを使った。その文字は南宋刊本『後漢書』から必要なものを切り抜いて用いたという。当時一般の古活字版の多くが，朝鮮活字版の柔らかな線質でやや幅広の文字を手本としていたのに対し，本書は筆画が鋭く，全体に縦長のプロポーションであるのはそういう事情による。ただし，金属活字の不足分を補うため，木活字も使われた。



大藏一覽集序
安定郡王　令衿超然居士
一覽集奇特事也工夫甚富雖然立意纂述
如來出世行位法門其間委曲覼縷爲一切
衆廣說葛藤至於把手拖拽人處老婆心切
不可具載有爲無爲之事聲沈顯用蓋已說
了不知更下甚麼擺脣鼓舌流言語爲此事出
氣僕初地無根扣道有意無文味義筆頭欲

図２　目録冊首

金属活字の特徴として，鋳造時に気泡が生じ，冷えて固まるとそれが小さな穴となって残ることがある。印面を見ると，筆画のなかに墨が付いていない部分がある（図２・４行目「門」の縦画など）のがそれである。朝鮮活字版にはほとんど見られないので，技術の未熟さが原因なのかもしれない。また，一つの母型から複数鋳造出来るので，同一印面に全く同じ形の文字が出現する（図２・４行目と５行目の「切」など）。これも一個一個手彫りする木活字の印刷物にはない現象である。

組版はあまり整然とはしていない印象がある。これは金属活字自体の大きさ等が不揃いであったためか，あるいは木活字との混植によって不揃いになったためであろうか。

活字印刷には誤植が付きものである。本書は印刷時の校正が行き届いているためか，ほとんどないが，発見することが出来た４箇所はいずれも誤植を摺り消して上から墨で正しい字を記す，という方法で訂

図3　訂正の例

正している。図３は本来「無煩天無熱天」とあるべきところ，天と無のどちらかを飛ばして組んでしまったのに気づき，一字分のスペースに「天／無」と二字書き入れた例である。

そもそもなぜ『大蔵一覧集』なのか。伏見版やもう１点の駿河版は，古くから為政者必読の書とされてきた漢籍や，武家の棟梁として家康自身が愛読していた『吾妻鏡』など，天下人にふさわしい古典が並んでいる。それに比べて本書は無名といってよい。これも福井氏著によれば，家康は「内外二典」（仏教書とそれ以外の書）の世に有益な書を出版したいという希望があり，外典は羅山に推薦させ，内典は自身の戒師である増上寺の源誉の推薦で決めたという。

『大蔵一覧集』はその名のとおり，釈迦の生涯，中国への仏教伝来，教義や重要な概念，宋代に至る中国仏教の変遷などを，大蔵経の引用編集によってコンパクトにまとめた書物で，俗人にとっても有益なものとして家康も納得したのだろう。

なお，従来の目録類で編者を明代の人としているのは，中国の現存刊本が明代以降のものに限られ，そこには宋代の年号がある序文（書誌参照）が収められていないための誤解に基づくものである[1)]。日本では既に応永10年（1403），五山版が刊行されていて，これにも序文がある。駿河版の底本は宋刊本らしい。両者の本文の比較検討が待たれる。

本書は125部印刷されたうちの１部である。刊行直後，主要寺院に献納されたほか，御所に献上された３部が宮内庁書陵部に，羅山の手元に置かれた２部が国立公文書館内閣文庫に伝わる。他に名古屋市蓬左文庫蔵の２部，徳川ミュージアム彰考館文庫蔵の１部は，それぞれ尾張・水戸への御譲本である。

そして本書は，蔵書印が示すとおり，紀州徳川家旧蔵である。実は駿河版については，駿府にあった印刷器具も残部も全て紀州に譲られ，明治以降も数十部残っていたという。しかしその蔵書を著録した『南葵文庫蔵書目録』（1908年）には３部しか掲載されていない。南葵文庫を継承した東京大学総合図書館に現存するのは１部（しかも端本），残りの完本２部はそれ以前に流失し，１部は現在天理大学附属天理図書館所蔵，もう１部が本書である。反町茂雄『一古書肆の思い出　3』（平凡社，1988年）には，1942年に益田孝（三井財閥の重鎮，茶人としても著名）の遺した蔵書を買い取った際に本書があったと言い，後に『弘文荘古活字版目録』（1972年）に掲載され，このたび他の書店を経由して本学に収蔵された。駿河版２種を揃って所蔵する大学図書館は他に天理大学のみである。

謎多き古活字版，特に駿河版には未知の部分が多い。現在印刷博物館所蔵の残存活字（重要文化財）との照合や，『群書治要』との比較など，興味深いテーマが残されている。家康が後世に残した文化遺産の一つとして，研究教育に大いに活用されることを願っている。

【略書誌】

宋陳實編『大蔵一覧集』10巻目１巻（〔慶長20年〕刊（〔徳川家康〕）大本11冊　132X@209@11
原装香色無地表紙（27.3×19.1糎），押八双あり，四つ目綴，料紙厚手楮紙。外題なし，ただし左下に「目（一～十）」とあり。各冊前遊紙１丁。目録冊に紹興丁丑（＝27年，1157）安定郡王〔趙〕令衿超然居士序，大隠居士陳實自序あり。巻首「大蔵一覧集巻第一／寧德優婆塞陳實謹編」。四周双辺有界（20.7×15.4糎）８行17字，注小字双行，版心大黒口双内向花口魚尾（黒口と連続）「大蔵一覧幾（巻数）幾（丁付）」ただし巻２・26丁無魚尾。各冊丁数，目録46（うち序５），巻１・85，巻２・77，巻３・84，巻４・84，巻５・74，巻６・84，巻７・91，巻８・45，巻９・60，巻10・102（第100丁落丁のため，本来は103丁）。印記「舊和歌山／德川氏蔵」（朱陽刻方形3.5糎，巻３を除く各冊首）「南葵／文庫」（同前3.2糎，葵唐草飾り枠，各冊首，ただし目・巻１・２は「ケシ」（消印）重捺），「月明荘」（朱陽刻長方形1.3×0.6糎，目・巻10冊尾）各冊表紙右下に南葵文庫ラベルあり，ペン書「集／26.／6.1.／2.／11.」，小口書「大蔵一覧　目（～十）」，虫損部分裏打あり，桐慳貪箱入り，蓋墨書「大蔵一覧」（隷書）。

注

1）「全国漢籍データベース」のうち萬暦版『大蔵一覧十巻』の書誌情報に詳しい。
http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/db-machine/kansekitenkyo/FA019705/0414015_007532.htm,
（参照　2020-07-15）.